

## 日本鉄鋼協会記事

### 春 季 大 会

本会春季大会は、4月2日から5日まで東京において開催され、第43回通常総会、第55回講演大会、特別講演会、懇親会、見学会の諸行事が行われたが、全国から多数会員の参加があり、いずれも盛会裡に終った。

**第43回通常総会：**4月2日午後、東京大学工学部大講堂において開催。佐藤理事開会を宣し、角野会長から挨拶があつた後議事に入つた。最初に定款一部変更（定員11名を15名に増員）の件が付議され、満場一致をもつて可決された。ついで理事、監事および評議員の選挙が行われ、続いて32年度事業報告、収支決算および財産目録の件並びに33年度事業計画および収支予算の件を一括議題に付し、俵理事の事業報告、青木理事の会計報告、河上監事の監査報告があつて、両件とも異議なく承認可決された。続いて長谷川開票委員より理事、監事および評議員の選挙結果の報告があつた。（当選者は別紙会告の通りにつき省略）。

この後一旦休憩、その間別室において臨時理事会を開催、互選の結果会長に塩沢正一、副会長に石原善雄（副会長平世将一は任期中につき引き続き在任）が選任された。よつて総会を再開、塩沢新会長、石原新副会長よりそれぞれ挨拶があつて会を閉じた。

引続いて表彰式が行われ、角野会長より下記受賞者諸氏（敬称略）にそれぞれ表彰状並びに賞牌または賞金を贈り、午後2時式を終つた。

服部賞（賞牌）藤木 俊三

香村賞（同）金丸 陟章

俵 賞（賞牌および副賞）三島徳七・牧野 昇

渡辺賞（賞牌）松永陽之助

協会賞（賞金）秋元信一、岡 勇、岡本頼二、桑原康長、菅沢清志、板倉 務、谷口豊吉、福田宣雄、前田正義、三宅貞信

**第55回講演大会：**4月2日、3日、4日の3日間引続いて東京大学工学部において開催された。第1日午前9時20分振鈴にて聴講者一同着席、角野会長より開会の挨拶があり、ついで4会場において講演が開始された。今回より各会場ともスライドを利用し得ることになつたので大変都合であつた。講演は第1日25、第2日55、第3日53合計128の多数に上り、聴講者も400名を超え頗る盛会であつた。

**特別講演会：**4月2日午後2時から工学部大講堂において開催、服部賞、香村賞、俵賞および渡辺賞を受けられた下記諸氏を講師として、それぞれ有益な講演が行われた。

鋼板製造の最近の進歩と諸問題

八幡製鉄所管理局長補佐 藤木 俊三君

焼結鉄単味使用による鑄物鉄の吹製について

尼崎製鉄取締役生産部長 金丸 陟章君

18-8 ステンレスの工業化に関する基礎研究

日本冶金工業顧問 松永 陽之助君

最近の永久磁石材料の研究

東京計器製造所磁鋼部 牧野 昇君

**懇親会：**4月2日午後6時から、神田錦町学士会館本館において日本金属学会と共同にて会員懇親会を開催した。恒例により、敬老の意を表するため特に長老諸先輩を来賓として迎え、また両会の表彰者諸氏を招待し、両会の役員並びに一般参会者を合せて出席者180名の多数に上り甚だ盛会であつた。開会のはじめに当り広田金属学会角野鉄鋼協会両会長の挨拶があつて後開宴、食後桂井三博士、井上匡四郎博士、村上武次郎博士等諸先輩の有益なお話があり、ついで藤木俊三、中村素両氏がそれぞれ受賞者を代表して謝辞を述べられ、また本年の秋季大会開催地東海支部を代表して錦織清治氏より挨拶があつた。最後に石原米太郎氏の発声にて両会の万歳を三唱、午後8時和氣霽々裡に散会した。

当日来賓としお招きした先輩各位はつぎの通りであつた。（席順不同）

俵国一氏（欠）、桂井三氏、金子恭輔氏、村上武次郎氏、川上義弘氏、井上匡四郎氏、黒田泰造氏、石原米太郎氏、松下長久氏、青山新一氏、浅田長平氏（欠）、松縄信太氏（欠）斎藤三三氏。

**見学会：**4月5日日本金属学会と共同で6班に分れ、東海原子力研究所をはじめ各工場研究所等の見学を行つた。これよりさき特に第1班および第2班見学希望者が頗る多数に上つたため、一方見学定員の増加を懇請するとともに抽籤により見学者を決定せざるを得ない状況であつた。また第5班は予定された東京芝浦電気府中工場が工場の都合により、中止となつたので代りに理学電機技術研究所の見学を行つた。（詳細は6月号掲載の見学記参照）

**展示会：**日本金属学会との共催による商品展示会が3日間にわたり、第一号館において開催された。明石製作所をはじめ54社の出品にかゝる各種機械、計器、新製品が多数展示、紹介され参観者が続々と入場して賑いを呈した。

支部長会議：日時：4月3日（木）場所：港区芝白金台町八芳園。出席者：角野会長，前田北海道支部理事，的場東北支部長，菊池北陸支部長，河合関西支部理事，瀬尾中国四国支部長，松塚九州支部理事，ほか理事，監事，前会長，常務委員，事務局長。

議事：Ⅰ．本部よりの報告。Ⅱ．各支部の事業，運営状況報告。Ⅲ．本部支部間の連絡について。Ⅳ．本会の事業運営その他本会発展に関する意見。議事を終つて懇談会に移り，意見の交換を行つた。

ウォリス氏講演会：4月17日来朝中の米国マクグロ・エヂソン社レクトロメルト炉ディヴィジョン社長 W.B. ウォリス氏を招き，日本生産性本部7階ホールにおいて本会主催の講演会を開催，つぎの演題による同氏の講演が行われた。“アメリカ合衆国における電気製鋼の最近の発達について”（通訳大同製鋼，中岡 章氏）

東北支部：支部評議員の選挙を行い，つぎの通り選出した。（敬称略，○印支部理事）

青木猪三雄，綾部 先，五十嵐 勇，○今井勇之進，海野 三朗，○小野 健二，大内 峻，大島 文平  
大貫 富蔵，大野 嘉市，音谷 登平，金子 淳，川手 寿夫，小池 与作，○後藤 秀弘，○佐藤 知雄  
○佐山 勲一，○斎藤 恒三，○三本木貢治，田畑 農夫，高橋 剛彦，高橋 了，高橋市太郎，○富永 在寛  
不破 祐，本間 正雄，増本 量，○的場 幸雄，○門間 改三，山崎 正一

北陸支部：役員の変更を行い，つぎの通り決定した。（敬称略）

支部理事 菊池浩介，斎藤弥平，田宮鉄四郎，橋浦彦三，藤田輝夫，松浦次義，熱田友二

支部評議員 菊池浩介，岩崎航介，近藤正男，熱田友二，加藤純一，斎藤弥平，塩谷周三，田宮鉄四郎，  
内藤平八郎，青木不二男，西野十朗，橋浦彦三，藤田輝夫，松浦次義，室町繁雄，森棟隆弘，  
養田 実，松尾一郎，吉川三郎

また支部規則を全面的に改正，事務所を富山県新湊市中伏木 214 日本鋼管富山電気製鉄所内に移転した。

東海支部：3月16日支部総会を開き，つぎの新任役員を決定した。（留任役員省略，敬称略）

支部長 岡田俊一（新三菱重工業名古屋製作所長）

支部評議員（○印理事） 石原康正，市川理衛，盤城恒隆，畑 栄一，林伸太郎，花井 優，西川政一，○岡田俊一，渡瀬常吉，○鹿取一男，○丹治道生，多田嘉之助，中尾富士雄，永田重雄，○矢島悦次郎，矢野啓二郎，柳沢正昭，松居菊千代，古沢浩一，○佐野幸吉，坂尾 弘，塩川孝信，森田正俊，茂木吉次，関口次郎

中国四国支部：3月26日広島市基町郵政会館において第3回講演大会を開催。各種鋼材の窒化について日本製鋼所堀木幹夫君，ほか10題目についての研究発表講演が行われた。

## 日本鉄鋼協会第43回通常総会における表彰者推薦理由書

### 服部賞受領者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所

管理局長補佐 戸畑鋼材部長兼務

工学士 藤木 俊 三君

#### 新鋭設備の建設並びに技術導入による鋼材製造 作業の合理化と新品種の生産確立

君は昭和8年東京大学を卒業の後直ちに八幡製鉄所に入所，鋳力板工場に勤務してその製造法に関する実地経験を積むとともに，ブリキの量産並びに品質改善について苦心研究を続けた。

昭和11年ブリキの量産を目標とするストリップミル建設の計画成るや，直ちにこれに参画して鋼板製造の画期的変革に着手，国内最初のストリップミルを建設して今日におけるストリップ製品発展の基礎をつくつた。

この間君はストリップ連続圧延の技術習得のため米国に出張して操業技術を体得し，創業に当つては率先作業を指導する傍ら，作業員の教育に努力し，爾後の作業円滑化に貢献するところ多大なるものがあつた。

昭和25年新ストリップ建設が企図されると，再度米国に派遣され詳に彼の地の近代設備につき調査し，計画具体化の推進力となり新ストリップ一連の建設を完成しその効果は着々と顕われつゝある。

昭和27年選ばれて鋼材部長となり，戸畑地区新計画

の実施と共に八幡地区老朽設備の改造更新を図り，特に珪素鋼板については，短時日の間に優秀な製品を供給し得るに至らしめた。

また熱延珪素鋼板にストリップミル活用の有利性を確信し，冷延珪素鋼板の試作を推進指導し，多大の困難を克服して遂に独特の新品種オリエントコアあるいはハイライトコアの工業的生産を開始するに至つた。

珪素鋼板について厚板関係設備の合理化を案面し，新工場の建設を促進，32年6月超広巾各種中厚鋼板，大量生産の弾力性に富む新厚板工場を完成し，創業6カ月後早くも公称能力突破の偉力を発揮し，設備合理化の第一目標を達成した。

以上の如く新鋭設備の建設並びに技術導入による鋼板製造作業の合理化と新品種の生産確立に対する君の功績はまことに顕著であつて，表彰規程第3条により服部賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 香村賞受領者

尼崎製鉄株式会社取締役生産部長

金丸 陟 章君

#### 硫酸焼鋳焼結鋳の高率配合並びに 設備改善による製鉄技術の向上

君は大正11年旅順工科大学工学専門部を卒業し，直ちに南満洲鞍山製鉄所に勤務，昭和26年尼崎製鉄株式

会社に入社、今日に至っている。

同君は、かねてより未利用国内資源の活用に深い関心を抱き、特に硫酸滓の脱銅処理効果に着目し、昭和28年尼崎第1高炉が再開されるや直ちに脱銅硫酸焼鋳単味焼結鋳の高率使用を企図、その豊富な経験と卓越した技術により、部下をよく指導、高炉単独メーカーとしての最良の経済的操業を目指して鋭意努力を重ね、遂に昭和29年果敢よく全焼結鋳装入操業法を確立し、戦後わが国における焼結鋳の高率配合操業の先鞭をつけるに至った。

また、不備な設備の改善および能力増強に率先積極的な研究を積み、操業中の第一高炉の炉腹上部を中断し、鋳石受金物の取替並びに冷却函の操入等の難作業を敢行し、よくその実を挙げ業界に炉命延長対策に関する貴重な資料を提供した。

さらに昭和31年同社第2高炉新設に際しては、再度にわたり渡独し周到な調査研究の下に独乙式高炉の長所を合理的に採り入れ着工以来僅か1年の短期間に全工事を完了し、高炉建設工事の記録を樹立した。

かくの如く同君はわが国製鉄技術の向上に貢献し、鉄鋼生産に寄与するところまことに顕著なるものがある。よつて同君は表彰規程第4条の規定により香村賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 俵賞受領者

東京大学名誉教授、学士院会員  
工学博士 三 島 徳 七君  
株式会社東京計器製作所磁鋼部  
工学博士 牧 野 昇君  
M.T. 磁石の工業化に関する実験 (論文)

両者の共同研究の結果、会誌「鉄と鋼」第43年5、6、7号に発表された“M.T. 磁石の工業化に関する実験”と題する論文は、昭和32年中「鉄と鋼」に掲載された論文中技術上最も有益な論文であると審定した。

よつて同論文の寄稿者である両君は表彰規程第5条の規定により俵賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 渡辺賞受領者

日本冶金工業株式会社 顧問  
工学士 松 永 陽之助君

#### ステンレス鋼の製造並びに研究に関する功績

君は大正11年九州大学を卒業後東北大学工学部並びに金属材料研究所において研究に従事、昭和2年より日本金属工業株式会社、日本冶金工業株式会社等に歴任し現在日本冶金工業株式会社の顧問の職にある。

この間大正13年より電熱線の研究並びに製造に従事これが国産化を目標として大正15年に創立された日本電熱合資会社(現日本金属工業株式会社)に入社、技師長としてニッケルクロム系、ニッケル鉄クロム系電熱線の製造工業技術の基礎を確立した。また昭和3年には商工省奨励金の交付を得て、鉄クロムアルミ電熱線の製造について同様の業績を挙げた。

昭和3年18-8ステンレス線、昭和6年18-8ステンレス板の製造を開始してこれが製造工業技術の基礎を確立した。

第2次世界大戦中わが国の陸海軍の火薬製造設備その他の18-8系ステンレスは、ほとんどすべて君が技術を創設した日本金属工業並びに日本冶金工業両社の生産に係るものである。また戦後現在に至るまで、旺盛な新興化学工業に用いられている耐酸鋼も、その大部分が両社の供給によるものである。

上記の如く、君のステンレス鋼の研究並びに製造上の功績はまことに顕著であつて表彰規程第7条の規定により渡辺賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 協会賞受領者

日本鋼管株式会社川崎製鉄所製管部長  
工学士 秋 元 信 一君  
鋼管製造作業に関する改良考案

君は昭和5年京都大学工学部冶金科を卒業し直ちに日本鋼管株式会社に入社したが、爾来もつばら製管技術の改善、設備並びに作業管理方式の改良に努力を払い、作業改善について幾多の考案を行つた。すなわち

1. 入社以来、川崎製鉄所におけるわが国唯一の鍛接管工場に勤務し、鍛接管用帯鋼の国産化に成功し、ついで昭和13年転炉工場が創設されるや塩基性転炉鋼による鍛接管用帯鋼の使用について幾多の研究を行つた結果その100%実用化を可能ならしめた。また鍛接管用帯鋼の鍛着性に関する各種の研究を行い、作業標準を確立した。

さらに鍛接炉の改良を行い「スケール・フリー・パイプ」の製造に成功し、その製品の品質はアメリカのナショナル・チューブ社のそれを凌駕し、当時ほとんど輸入品に依存した小径のガス管、水道管を完全に駆逐するに至り、わが国鋼管工業に画期的な貢献をなした。

2. 川崎製鉄所大径管工場に勤務中においては、わが国唯一のピルガー・ミル方式による大径継目無鋼管の製造設備について、各種文献調査、外国技術者招へい、技術員の海外派遣、ならびに各種の試験研究を行い、この方式による大径継目無鋼管製造技術の進歩ならびに製品品質の向上に大きな貢献をなした。

3. 技術研究所勤務に転ずるや、海外技術文献の収集整理、現場技術員に対する技術文献紹介のシステムを確立し、内外技術文献を技術者に能率的に利用せしめる道を開いた。

なお、この間鉄鋼協会編集委員となり、とくに鋼管製造分野についての監修を担当した。

4. 昭和29年わが国唯一の連続式鍛接管製造設備が建設されるに当つては、旧鍛接管工場における幾多の技術的経験に基き、各種の困難を克服し、きわめて短期間に軌道にのせ、品質優良にして低廉な製品の製造に寄与した。

5. ついで世界に有数な大規模最新式の中径継目無鋼管工場建設に参画し、昭和32年末、これを稼働せしめるに少なからぬ貢献をなした。

以上の業績に示すとおり入社以来、終始一貫鋼管製造に従事し、作業技術の進歩並びに設備の新設改善に熱意を傾け幾多の改良考案を実施した功績は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分であるものと認めらる。

**協会賞受領者**

株式会社神戸製鋼所機械技術管理課長補佐  
岡 勇君

**計測管理技術の進歩発達**

君は大正 14 年電機学校卒業、富士電気株式会社および昭和製鋼所に勤務して、計測技術並びに計測管理技術の研究に専念し、特に昭和 22 年神戸製鋼所に入社以来同社の計測管理専門技術者として同所並びに尼崎製鉄の諸設備の計装を行い鉄鋼業界にその範を示すとともに、24年日本鉄鋼協会熱経済技術部会が発足するやその委員となり、たえず部会をリードし、特に熱経済技術要覧計測編並びに電子管工業計器要覧の執筆編集に際してはその中心となり、また「鉄と鋼」に「鉄鋼業におけるオートメーション」と題する優秀論文を発表した。昭和32年には製鉄技術専門視察団の一員として計測管理を欧米諸国にわたり調査するなど、今や鉄鋼業の計測管理とオートメーションの第一人者として業界を指導している。

上記の如く君の鉄鋼業および全産業の計測管理技術の進歩発達に対する貢献は多大であつて、表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

**協会賞受領者**

日本特殊鋼株式会社研究部検査課長  
工学士 岡本 穎 二君

**特殊鋼の高周波炉熔解法および品質管理技術の進歩発達**

君は昭和 14 年京都帝国大学工学部採鉱冶金学科卒業直ちに日本特殊鋼株式会社に入社、製鋼部製鋼課に勤務し昭和 27 年研究部検査課長となり現在に至っている。

この間主として高合金鋼の高周波炉による熔解技術の改善に当り、特に内燃機関弁用鋼としてのニッケル—クロム—タンゲステン耐熱鋼および大型軸受用高炭素—クロム—マンガン軸受鋼の熔解技術に関して顕著な業績を挙げ、今日これらの特殊鋼製造技術の基礎を確立したものである。また検査課長に就任以後は主として特殊鋼の品質管理技術の発展につとめ、特に自動車用鋼および軸受鋼についてその結晶粒度、焼入性および非金属介在物等の試験法に関する研究改善につとめ、日本工業規格制定に際して工業技術院金属部会専門委員会の専門委員としてこれらの試験法規格の確立に尽力し、わが国の特殊鋼品質改善に貢献した。

かくの如く君はわが国特殊鋼の製造技術の発展に寄与し、特に特殊鋼の高周波炉熔解法および品質管理技術の進歩発達に多大の功績をあげており、表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

**協会賞受領者**

東洋鋼鉄株式会社中央研究所副所長  
工学士 桑原 康 長君

**冷間圧延並びに理論の発展に対する功績**

君は昭和 16 年東京大学工学部航空学科卒業の後、陸軍航空技術研究所において航空機用鉄鋼材料に関する研究に従事し、終戦と共に東洋鋼鉄株式会社に入社、爾来鉄鋼圧延法の基礎理論および圧延作業の究明に努力して

来た。特に四段冷間圧延機による圧延作業条件の研究については多くの研究実績を発表しわが国冷延薄板製造技術に多大の貢献をなした。すなわち調査研究の一部を「鉄鋼の冷間圧延」と題する単行本(工業技術全書9巻)として発行したが、わが国においてこの種の纏つた資料が僅少なため好評を博し、就中熱間圧延より冷間圧延に移行しつつある現鉄鋼業界に寄与するところ甚大である。その他冷間圧延に関する数多くの有益な論文を発表している。

以上に示したように君の斯業に対する功績は多大であつて、表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

**協会賞受領者**

住友金属工業株式会社製鋼所製造部製鋼課副長  
工学士 菅 沢 清 志君  
同 製造部製鋼課副長  
板 倉 務君

**重油による酸性平炉操業技術の確立**

菅沢清志君は昭和 19 年東京大学工学部冶金学科を卒業、板倉務君は昭和 17 年明治専門学校冶金工学科を卒業、住友金属工業株式会社に入社したが、両君とも入社以来一貫して、製鋼所製鋼課に勤務し、この間両君はよく一致協力して多年にわたる平炉作業の経験とたゆまざる研究によつて多大の功績をあげてきた。

特に両君はわが国で最初の重油による酸性平炉の操業に成功した。もともと酸性平炉においては、酸性平炉特有の精錬法に必要な燃焼条件を得ることが困難であると考えられ、また、同時に重油中の硫黄の製品成分におよぼす影響のために、今まで、わが国では重油による酸性平炉の操業は全く行われていなかった。しかし重油燃焼法の調査研究と現在わが国に輸入されている重油の性状調査によつて、わが国においても重油による酸性平炉の操業が可能であるのみならず、発生炉ガスによるよりもむしろ良質な鋼の熔製が可能であると考え、それを実現し成功した。

すなわち、酸性平炉における重油の燃焼条件を確立すると共に、低硫の鋼を製造することを可能にした。また鋼塊の品質を向上せしめたのみならず、酸素の徹底的利用による軟鋼の製造等製品々種の拡大にも努めた。同時に製鋼時間あたり鑄込t数9t(平炉容量60t)の製鋼能率を実現し塩基性平炉とほぼ同等までにその能率水準を引上げ世界最高の能率に到達せしめることができた。

かくの如く酸性平炉の操業技術の確立によつて品質向上、品種の拡大、能率の向上等を可能にし輸出用の車輛部品並びに船舶部品用優良鋼塊のより良品質なより低廉な製造に成功し、これら製品の国外輸出への途を開いてわが国酸性平炉の操業史上特筆すべき業績をうちたてた。

以上の業績については、両君とも日本鉄鋼協会講演大会において多数の報告を行つた通りであり、わが国の製鋼分野における技術の発展に貢献した功績は甚だ大きい。よつて表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 協会賞受領者

株式会社日本製鋼所室蘭製作所熱処理課長  
工学士 谷 口 豊 吉君  
ローターシャフト製造に関する功績

君は昭和 14 年東京工業大学応用化学科卒業、直ちに日本製鋼所に入社、室蘭製作所研究部に勤務し、製鋼原料並びに製鋼化学に関する研究に従事し、酸性平炉による高級鋼熔製の基礎確立に多大の貢献をなした。

昭和 24 年選ばれて材料課長となり、戦後製鋼原料の幾多の悪条件を豊富なる研究経験によつて克服した。特に火力発電用ローターシャフトの製造に当つては、各需要者と密接な連繋の下にその要求品質にこたえるべく多大の努力をなし、その製造方式の確立に寄与した。

君はまた選ばれて米国 U E 社に鑄鋼ロールの熱処理技術を学び、帰朝後昭和 31 年熱処理課長となり、国内各種圧延機の使用条件に適した U E ロールの選定およびその寿命延長についてよく U E 技術を生かして不断的努力をなした。また、発電機ローターシャフトに関する熱処理の改善によつて近来益々大型化するローターシャフトの要求品質にこたえ本邦火力発電機の進歩向上に寄与した功績は大きい。よつて表彰規程第 7 条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 協会賞受領者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所戸畑鋼材部  
戸畑第二圧延課長

福 田 宣 雄君

#### 圧延の新設備の建設及び作業

君は昭和 10 年熊本高等工業学校を卒業直ちに八幡製鉄所鋼板部に勤務し薄板生産に従事してきたが、昭和 14 年旧ストリップ工場の建設に参画し、同 15 年 9 月作業の開始せられるや現場技術員を経て冷延、熱延、ブリキの各掛長を歴任、その間空襲による工場設備の被害修復、終戦による熟練者の離散等幾多の困難を克服して戦後速やかに作業を再開に導くなど我国ストリップ圧延作業の発展に寄与するところ大であつた。

昭和 25 年 11 月新ストリップ一連の建設が企図されるや帯鋼設備掛長として卓越せる技術と豊富な体験を縦横に駆使してこれが建設にまい進し、また昭和 28 年 5 月から同年 7 月まで合衆国に出張、進歩した技術を体得し帰朝した。昭和 29 年 4 月建設工事の大略完成により選ばれて該設備の課長となり鋭意努力して定常作業に成功した。

以上のごとく新ストリップ工場一連の新設備の建設と短日時にこれが正常作業を行うことができたのは実に同君の卓越せる技術と努力によるもので、今日我国の薄板界がストリップミル時代に発展したのは実に同君の寄与するところ甚大である。よつて表彰規程第 7 条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 協会賞受領者

富士製鉄株式会社室蘭製鉄所製鋼部製鋼課長  
前 田 正義君  
製鋼作業技術の改善進歩

君は、昭和 12 年秋田釜山専門学校冶金学科を卒業、

直ちに日本製鉄株式会社に入社、八幡製鉄所製鋼部に勤務、昭和 18 年輪西製鉄所製鋼部に転勤、造塊掛長、平炉掛長歴任後、昭和 24 年製鋼課長となり今日に至つて

いる。  
戦後生産を開始した室蘭製鉄所製鋼工場においては、設備の荒廃、関連部門の生産不振、粗悪な原燃料事情等作業遂行上困難な問題が山積していた。同君はかかる事情下においてよく製鋼作業の進むべき方向を洞察し、平炉操業における燃料および燃焼法の重要性に着目、今日まで製鋼技術全般の進歩発展に力をつくし、現在の高圧冷コークス炉ガス燃焼法、酸素使用による平炉操業を確立した。

この間における同君の業績の主なるものを摘記すればつぎの通りである。

1. 戦後の原燃料事情困難な時期における燃焼設備強化並びに燃焼方法の研究。
2. コークス炉ガスの有効利用法に関する研究（冷コークス炉ガスのバーナーによる燃焼方法の確立）
3. 高圧冷コークス炉ガス燃焼法の研究
4. 酸素製鋼法の研究
5. 高熔銑配合作業に関する研究

かかる同君の製鋼技術上における各種の研究に対する研鑽努力並びに工場担当者としての責任遂行の努力は特記に値するもので、同所の鋼塊屯当り燃料消費量は 70% という高銑配合作業条件にも拘らず、昭和 30 年 9 月においては平炉全基平均  $689 \times 10^3$  Kcal. うち成績良好なものは  $663 \times 10^3$  Kcal という世界的水準に到達し、その後鉄鋼の増産要求にこたえ、32年 7 月には月産 65313 t という生産新記録を樹立している。

以上同君の業績は、我が国製鋼技術の進歩に貢献するところきわめて顕著なものがあつて、表彰規程第 7 条の規定により協会賞を受ける資格充分なるものと認める。

### 協会賞受領者

日亜製鋼株式会社取締役尼崎工場次長兼製造部長  
三 宅 貞 信君

#### 製鋼および附帯作業技術の向上

君は大正 11 年熊本高等工業学校採鉱冶金学科を卒業小倉製鋼株式会社に入社後、八幡製鉄所、輪西製鉄所を経て、昭和 23 年日亜製鋼株式会社の平炉再開に当り製鋼部長として入社し、現在取締役尼崎工場次長兼製造部長である。

この間、八幡製鉄所においては専ら平炉作業の向上に努力し、ことに平炉と混銑炉との合併法、タルボット法および傾注式平炉の作業法等の研究に努め、また銑力材、薄板材、珪素鋼板材、地下鉄第 3 軌条等の製造に研究努力すると共に、炉体の改造、品質の向上に尽した。また選ばれて輪西製鉄所に転ずるや戦時中の諸困難を克服してよく製鋼作業の能率を向上させ現在の基礎を築いた。

また日亜製鋼株式会社に入社するや、困難なる永年休止工場の再開に専念し炉体の改造、附属設備の整備につとめ、作業開始するや帯鋼材の品質向上、重油原単位の低下、歩留の向上等に画期的成績を示し、昭和 25~6 年頃米国鉄鋼指導団より絶賛を博し、かつ同業他社を啓発するところ多大であつた。また米軍向弾丸材をはじめそ

の他諸種の高炭素鋼の精錬技術の向上につとめ、特極軟鋼と共にその技術的向上に貢献した。

なお昭和26年同社が呉地区に進出するに際しては製鋼関係を兼務して計画、整備、作業、開始を行い順調なる発足をし今日の如き発展の基礎を作つた。

以上の如く君は大正11年以來36年間終始一貫製鋼作業の向上に努め製鉄業に貢献するところ多大であつた。よつて君は表彰規程第7条の規定により協会賞を受ける資格充分であると認める。

# 昭和32年度 (昭和32年3月1日から昭和33年2月28日まで) 事業報告および会計報告

## 事業報告

### I. 会議

本会運営上の会議をつぎの通り開催した。

- 第42回通常総会 昭和32年4月2日
  - 理事監事および評議員の選挙
  - 昭和31年度事業報告、収支決算並びに財産目録の報告
  - 昭和32年度事業計画並びに収支予算の承認
- 評議員会 昭和33年2月26日
  - 昭和32年度事業報告、収支決算並びに財産目録の報告
  - 昭和33年度事業計画並びに収支予算の承認
  - 定款一部変更の件
  - 次期理事、監事、評議員候補者の推薦
- 理事会 毎月1回、臨時1回、計13回開催、毎月の事務並びに会計事項の審議、その他一般会務を協議処理した。
- 編集委員会 毎月1回、臨時2回計14回開催、会誌の編集方針、企画、掲載論文の選定、技術資料の蒐集その他会誌編集に関する一切の事務を協議処理した。
- 企画委員会 随時6回開催、事業運営上の諸企画につき審議立案した。
- 支部長会議 昭和32年4月4日  
各支部の事業状況の報告があり、協会発展に関する件、本部支部間連繫に関する事項等につき協議した。

### II. 会員

本年度においてつぎの通り会員の異動があつた。

異動	名譽 会員	賛助 会員	維持会員		正 会員	学 生 会 員	外 国 会 員	合 計	会 員 組 織 体 数
			員 数	口 数					
昭和32年 2月28日 現在	18	40	173	883	5,223	255	17	5,726	73
入会			+5	+23	+273	+81	+7	+366	
退会			-5	-10	-156	-23		-184	
死去		-1			-8			-9	
住所不明					-5	-1		-6	
復活					+13		+2	+15	
転格					+80	-80			
昭和33年 2月28日 現在	18	39	173	896	5,420	232	26	5,908	75

### III. 役員および委員

本年度においてつぎの通り役員および委員の異動があつた。

- 理事  
昭和32年4月2日通常総会において任期満了理事の改選を行い、つぎの通り選任した。  
青木不二男 伊藤 正夫 佐藤 忠雄 俵 信次  
橋口 隆吉 平世 将一 葦沢 大義(補欠)  
同日理事会において互選によりつぎの通り選任した。  
副会長 平世 将一
  - 監事  
昭和32年4月2日通常総会において任期満了監事の改選を行いつぎの通り選任した。  
河上 益夫
  - 評議員  
昭和32年4月2日通常総会において任期満了評議員の改選および増員評議員の選挙を行い、つぎの通り選任した。  
浅田 長平 浅田 讓 足立 彰 池ヶ谷頼緒  
石田 稔 入 一二 上野建二郎 梅津 七藏  
遠藤勝治郎 大河原栄之助 大谷米太郎 小島 新一  
香春三樹次 嘉村 平八 桂 弁三 川上 義弘  
川端 駿吾 木村 音吉 菊池 浩介 絹川武良司  
葛誠 四郎 桑田 賢二 幸田 成康 佐々川 清  
佐藤 知雄 斎藤 省三 斎藤 弥平 里井幸三郎  
里村 伸二 島村 哲夫 高石 義雄 滝沢 工  
中島 省一 永野 重雄 西村 秀雄 錦織 清治  
蜂谷 茂雄 平岡 正哉 広田 寿一 増本 量  
町永 三郎 的場 幸雄 宮下格之助 室井嘉治馬  
毛利猶三郎 望月 要 山田良之助 山野上重喜  
山内 二郎 柳 武 森 暁(補欠)
- (増員)
- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 伊東 寛治 | 井上 友喜 | 大森 基一 | 岡田 儀一 |
| 岡村 武  | 金田 義夫 | 川手 寿夫 | 小柴 定雄 |
| 酒井 佐敏 | 志賀 芳雄 | 瀬尾喜代三 | 谷川 正夫 |
| 多賀谷正義 | 田畑 農夫 | 外島 健吉 | 丹羽貴知識 |
| 浜田 正信 | 藤井 寛  | 松本兼二郎 | 村尾時之助 |
| 村田 巖  | 森崎 晟  | 森田恵三郎 | 森田 志郎 |
| 山田 熊男 | 青木 均一 | 芥川 武  | 伊藤 五朗 |
| 今井勇之進 | 太田 久男 | 奥村 福次 | 木下 茂  |
| 北川 一栄 | 里見 雄二 | 菅野 猛  | 田辺友次郎 |
| 千葉 茂  | 出淵 国保 | 中安 閑一 | 長崎 博  |
| 野島福太郎 | 福島 政治 | 堀田 之孝 | 松原与三松 |

皆川 孝光 八木貞之助 山川 貞雄 和田 亀吉  
渡辺 博史

#### 4. 常務委員

昭和 32 年 5 月 10 日つぎの通り常務委員を追加委嘱した。

浅田 譲入 一 二 石原 善雄 作井 誠太  
武田 喜三 山内 二郎

33 年 1 月 10 日 常務委員辻畑敬治辞任

#### 5. 編集委員

昭和 32 年 5 月 10 日つぎの通り編集委員を追加委嘱した。

小犬丸胤男

### IV. 事 業

本年度における事業の概要つぎの通り。

#### 1. 会 誌

「鉄と鋼」第 43 年第 3 号より第 44 年第 2 号まで 12 冊  
Tetsu to Hagané Abstracts No. 5 (1955 年) を発行した。なお No. 6 (1956 年) は刊行準備中。

#### 2. 刊 行 物

鋼の熱処理—基礎と作業標準

Japan Science Review, Mining and Metallurgy  
第 1 巻, 第 2 号 (他学協会と共同)

鉄鋼技術共同研究会報 第 6, 7, 8 号 (鉄鋼技術共同研究会)

鋼塊表面疵の分類 (同上)

電子管計器要覧 (同上)

最近における製鉄技術の展望 (同上)

#### 3. 鉄鋼技術講座編集委員会の設置

使用者のための鉄鋼技術講座を編集するため、32 年 7 月あらたに委員会を設け、これが編集に着手した。

#### 4. 鉄鋼技術共同研究会の活動

鉄鋼技術共同研究会 (通商産業省重工業局, 日本鉄鋼連盟および本会三者の共同組織) は製鉄部会, 製鋼部会, 鋼材部会, 特殊鋼部会, 熱経済技術部会, 品質管理部会, 調査部会の七部会にわかれ, 各部会はまたそれぞれ分科会にわかれて, 担当の研究事項について活発なる調査研究を行った。

#### 5. 原子力研究委員会の発足

原子力工業の発展に対応する鉄鋼生産技術の育成に必要な調査研究を行うことを目的として, 32 年 7 月委員会を設置し, 調査研究に着手した。

#### 6. 工業標準原案の作成

工業技術院長よりの委託により鋼の浸炭硬化層の深さ測定方法工業標準原案作成のため委員会を設け, 調査研究を行い, 成案を得て工業技術院長に報告した。

#### 7. 講演会・見学会および講習会等の開催

##### (1) 春季講演大会

講演会 昭和 32 年 4 月 2 日より 4 日まで東京工業大学において開催

講演 131 特別講演 3

見学会 昭和 32 年 4 月 5 日

見学箇所 18

##### (2) 秋季講演大会

講演会 昭和 32 年 10 月 12 日より 14 日まで戸畑

市九州工業大学において開催。

講演 115 特別講演 4

見学会 昭和 32 年 10 月 15 日

見学箇所 26

##### (3) 講習会

32 年 6 月 13 日より 3 日間東京都立工業奨励館において「鉄鋼の使い方」講習会開催, 青木猪三雄氏の「鉄鋼の用途による選び方」をははじめ 9 講師の講義を行った。

##### (4) 講演会

32 年 3 月 27 日東京都日本工業倶楽部において開催  
米国における電気炉 50 年の歩み

講師 アメリカンブリッチディヴィジョン

サミュエル, アーノルド氏

32 年 11 月 16 日東京都立産業会館において開催

鉄鋼業における熱管理技術について

講師 元ユーエス, スチール社技師

フレッド, エヌ, ヘイス氏

(5) そのほか, 他学協会との共催にてつぎの通り開催した。

第 7 回品質管理大会

塑性加工講演会およびシンポジウム

第 2 回金属材料の強度および疲労に関する総合シンポジウム

原子力特別講演会

第 2 回原子力シンポジウム

材料試験連合講演会

#### 7. 表 彰

昭和 32 年 4 月 2 日通常総会において表彰式を行い, 鉄鋼技術の功労者に下記の賞を贈り表彰した。

服部賞 村田 巖

香村賞 中島 省一

俵 賞 河合 正吉

渡辺賞 佐藤 忠雄

協会賞 相原満寿美 岡本 豊彦 栗山 俊治

白石 芳雄 菅野 猛 橋本 英文

武藤 千秋 益田 義三 守川平四郎

#### 8. 鉄鋼標準試料の分譲

従来に引続き鉄鋼標準試料の分譲を行つてはいるが, 最近需要増加のため品切を生じ, 分譲に支障を来たしたので, 特に鉄鋼標準試料委員会を設けて対策を研究, 製造依頼先の増加, 分析の促進等に努力したので, その後製造分析ともに着々進行し, 22 種の試料全部を整備, 分譲の求めに応じ得ることとなつた。

#### 9. 対外関係

1. 英文 Tetsu-to-Hagané Abstracts No. 5 (1955) を発行し, 米, 英, 仏, 独, 瑞典, ポーランド, スペイン, ノルウエー, カナダ, インド, インドネシアその他の海外諸国の鉄鋼関係学協会, 大学, 図書館, 研究所, 会社, 商社等に寄贈し, 技術の紹介交流に資した。なお Abstracts No. 6 (1956) は目下刊行準備中。

2. 他 6 学協会と共同で Japan Science Review, Mining and Metallurgy Vol. 1, No. 2 を編集刊行して広く海外に送つた。Vol. 2, No. 1 は刊行準備中。

3. 米, 英, 仏, 独, インド, インドネシアその他の諸

国の鉄鋼会社その他の諸団体と引続き会誌その他の印刷物の交換をした。

4. Abstracts 所載論文の原文翻訳の依頼等をはじめ取引の紹介その他の照会斡旋多きを加えたが、これらに対しそれぞれ回答を差し彼我の意思流通、技術の交流に努めた。

5. さきに外国会員制度を設けたが入会者漸次増加した。また会誌の海外頒布も増加した。

6. 32年 10 月米国で開催された第 2 回世界冶金会議に会員の出席を斡旋した。

V. 地方支部

北海道支部、東北支部、北陸支部、東海支部、関西支部、中国四国支部、九州支部の各支においても、それぞれ講習会、見学会、研究会、講演会等を開催した。

VI. 庶務事項

1. 昭和 32 年 3 月 6 日 八幡製鉄株式会社より渡辺記念資金一千万円の寄附を受けた。

2. 昭和 32 年 3 月 20 日 工業技術院長よりかねて委託を受けた中空鋼工業標準原案の調査報告書を同院長に提出した。

3. 昭和 32 年 4 月 27 日 昭和 31 年度事業報告、収支決算書、財産目録、昭和 32 年度事業計画、収支予算書および第 42 回通常総会報告を文部大臣に提出した。

4. 昭和 32 年 6 月 10 日 理事の登記変更および資産総額に関する登記変更申請書を東京法務局日本橋出張所に提出、登記を了した。

5. 昭和 32 年 7 月 6 日 工業技術院長より鋼の侵炭硬化層の深さ測定方法の工業標準原案作成の委託を受け、33 年 2 月 28 日調査報告書を同院長に提出した。

6. 昭和 32 年 9 月 25 日 石原米太郎氏より石原研究資金一千万円の寄附を受けた。

会 計 報 告

昭和 32 年度収支決算

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前年度繰越	389,490円	会 誌	6,247,240円
会 費	10,402,749	印 刷 費	5,043,702
維持会 員	4,863,500	編 集 送 費	328,424
正 会 員	5,276,496	発 行 費	875,114
学 生 会 員	157,659	刊 物 行	965,332
外 国 会 員	35,634	アブストラクト	0
入 会 金	69,460	会 員 名 簿	312,767
参加出席費	415,450	鋼 の 熱 処 理 法	652,565
総大会参加費	292,450	鉄 鋼 製 造 法	0
講習会出席費	123,000	熱 経 済 そ の 他	0
分 譲 収 入	1,757,540	会 合 費	624,986
会 誌 類	599,540	会 議 費	137,860
会 員 名 簿	26,600	総 大 會	298,851
鉄 鋼 標 準 試 料	1,131,400	演 説 会	26,538
印 税 収 入	1,324,565	講 習 會	122,447
鋼 の 熱 処 理	667,140	研 究 調 査 會	39,290
鉄 鋼 製 造 法	469,800	支 部 補 助 金	137,500
熱 経 済 そ の 他	187,625	人 件 費	3,087,747
廣 告 収 入	1,687,600	俸 給 及 手 当	2,319,020
調 査 委 託 金	30,000	旅 費 及 謝 礼	178,017
利 子	56,065	社 会 保 險 料	90,710
雜 収 入	66,889	退 職 積 立 金	500,000
		事 務 費	1,628,554
		借 室 料	491,100
		紙 墨 及 通 信 費	493,448
		交 通 費 そ の 他	58,245
		図 書 及 什 器 費	108,455
		鉄 鋼 試 料 諸 費	96,665
		振 替 時 金 手 数 料	204,702
		会 員 団 体 報 費	175,939
		会 館 資 金 積 立 金	2,000,000
		基 本 金 編 入	1,000,000
		予 備 費	133,009
		次 年 度 繰 越	305,980
合 計	16,130,348	合 計	16,130,348



別 途 会 計 収 支 決 算

昭和33年度(昭和33年3月1日から昭和34年2月28日まで)事業

計 画 お よ び 収 支 予 算

資 金 別	収 入		支 出	
	費 目	金 額	費 目	金 額
表彰並びに事業資金		294,123		294,123
	前年度繰越	156,991	債賞原型製作費	30,000
	高石義雄氏寄付金	50,000	表彰並びに事業資金	67,750
	本年度利子	78,644	高石義雄氏寄付金	50,000
	調整勘定分配金	8,488	元基金繰入金	40,000
			不足分基金繰入金	30,000
			満鉄、東洋拓殖、社債償却見返基金	22,287
			次年度繰越	54,086
八幡製鉄渡辺記念資金		470,709		470,709
	本年度利子	470,709	次年度繰越	470,709
石原研究資金		11,200		11,200
	本年度利子	11,200	次年度繰越	11,200
職員退職資金積立金		1,408,415		1,408,415
	前年度繰越	853,477		
	本年度利子	54,938		
	本年度積立	500,000	次年度繰越	1,408,415

事 業 計 画		
I. 会 議		
通常総会	1回	4月
評議員会(定例)	1回	2月
理事会(定例)	12回	毎月
支部長会議	1回	4月
II. 委 員 会		
編集委員会(定例)	12回	毎月
企画委員会(定例)	12回	毎月
鉄鋼標準試料委員会	2回	随時
工業規格委員会	4回	随時
原子力研究委員会		随時
鉄鋼技術講座編集委員会		随時
特別資金委員会		随時
表彰選考委員会	2回	2月
III. 集 会		
春季講演大会および見学会(東京)	1回	4月
秋季講演大会および見学会(名古屋)	1回	10月
講習会	2回	随時
講演会	4回	随時
座談会	4回	随時
鉄鋼技術共同研究会(重工業局、鉄鋼連盟と共同)		
実行委員会	2回	4月, 10月
製鉄, 製鋼, 鋼材, 特殊鋼, 熱経済技術, 品質管理, 調査各部会並びに分科会		随時
品質管理大会(他学会と共同)	1回	11月
塑性加工講演会(他学会と共同)	1回	12月
IV. 表 彰		
服部賞, 香村賞, 俵賞, 渡辺賞, 協会賞	1回	4月
V. 刊 行		
会誌“鉄と鋼”	12回	毎月
英文アブストラクト No.6(1956)	1回	10月
鉄鋼技術講座		随時
ジャパン・サイエンス・レビュー採鉱冶金篇		
(他学会と共同)	2回	3月, 9月
VI. 分 議		
鉄鋼標準試料(22種)		常時
会 誌		常時
会員名簿, 会員章		常時

財 産 目 録 別 途 資 金 財 産 目 録 明 細

昭和33年2月28日現在

昭和33年2月28日現在

項 目	金 額	項 目	金 額
(資産部)		表彰並びに事業資金	1,268,812円
什電図器	355,500	三井信託銀行信託預金	510,159
電話室敷社金	49,800	三菱信託銀行	279,029
借入金	32,240	安田信託銀行	220,292
分譲印	135,900	住友信託銀行	48,233
会議室	60,000	三菱銀行普通預金	196,373
分譲金	79,900	野田文庫	10,549
分譲金	1,900	野田文庫	4,177
分譲金	9,900	八幡製鉄渡辺記念資金	10,470,709
分譲金	95,454	三井信託銀行信託預金	2,500,000
分譲金	179,903	三菱信託銀行	2,500,000
分譲金	27,227	安田信託銀行	2,500,000
分譲金	3,396	住友信託銀行	2,500,500
		三菱銀行普通預金	470,709
合 計	1,031,120	石原研究資金	10,011,200
		大和銀行信託預金	10,000,000
		大和銀行普通預金	11,200
別 途 資 金 財 産	26,159,136	基 本 金	1,000,000
		三井信託銀行信託預金	1,000,000
		職員退職資金積立金	1,408,415
		安田信託銀行信託預金	1,408,415
		会館資金積立金	2,000,000
総 計	27,190,256	三菱信託銀行信託預金	2,000,000

### 収 支 予 算

昭和 33 年度収支予算

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前年度繰越	305,980円	会 誌	6,310,000円
会 費	9,700,000	印 刷 費	5,040,000
維持会	4,200,000	編 集 費	360,000
学生会	5,240,000	送 付 費	910,000
外国会	140,000	刊 行 物	650,000
学 生 会	40,000	アブストラクト	330,000
外 入 会	60,000	鋼の熱処理	60,000
参加出席費	460,000	鉄鋼製造法	70,000
総大会参加費	300,000	熱経済その他	190,000
講習会出席費	160,000	会 合 費	790,000
分 譲 収 入	1,560,000	会 議 費	150,000
会 誌 類	595,000	総 大 会 費	300,000
会員名簿その他	5,000	演 説 会 費	120,000
鉄 鋼 試 料	960,000	講 習 費	160,000
印 税 収 入	480,000	研 究 調 査 会 費	60,000
鋼の熱処理	90,000	支 部 補 助 金	160,000
鉄鋼製造法	117,000	人 件 費	3,690,000
熱経済その他	273,000	俸 給 及 手 当	3,120,000
広 告 収 入	1,440,000	旅 費 及 手 礼	270,000
調 査 委 託 金	30,000	社 会 保 險 料	100,000
利 子	50,000	退 職 積 立 金	200,000
雑 収 入	60,000	事 務 費	1,980,000
		借 室 料	550,000
		通 信 費, 交 通 費	600,000
		そ の 他	80,000
		図 書 及 什 器 費	250,000
		鉄 鋼 試 料 諸 費	120,000
		振 替 貯 金 手 放 料	200,000
		団 体 手 数 料	180,000
		雑 費	180,000
		会 館 資 金 積 立 金	200,000
		予 備 費	305,980
合 計	14,085,580	合 計	14,085,980

### 別途会計収支予算

資 金 別	収 入		支 出	
	費 目	金 額	費 目	金 額
表彰並びに事業資金		144,086円		144,086円
	前年度繰越	54,086	表 彰 費	90,000
	本年度利子	90,000	次 年 度 繰 越	54,086
八幡製鉄渡辺記念資金		1,250,709		1,250,709
	前年度繰越	470,709	記 念 事 業 費	1,250,709
	本年度利子	780,000		
石原研究資金		761,200		761,200
	前年度繰越	11,200	鉄 鋼 技 術 研 究 費	761,200
	本年度利子	750,000		
基 本 金		1,070,000		1,070,000
	前年度繰越	1,000,000	次 年 度 繰 越	1,070,000
	本年度利子	70,000		
職員退職資金積立金		1,708,415		1,708,415
	前年度繰越	1,408,415	次 年 度 繰 越	1,708,415
	本年度利子	100,000		
	本年度積立	200,000		
会館資金積立金		2,340,000		2,340,000
	前年度繰越	2,000,000	次 年 度 繰 越	2,340,000
	本年度利子	140,000		
	本年度積立	200,000		